

招待席

## 郡 虎彦

こおり とらひこ 劇作家 1890.6.28 - 1924.10.6 東京市京橋区に生まれる。誕生と同時に母方叔母の婚家郡家の養嗣子となるも病弱、「病気の問屋」と綽名された。学習院高等科の頃ワイルド、ダヌンチオ、ホフマンスタール、シュニッツラー等を耽読、後に北原白秋、木下杢太郎らの「パンの会」に加わり、さらに「白樺」創刊に最年少の同人となる。掲載作は、明治四十四年(1911)二十二歳で東京帝国大学文科英文科に入学した九月に「白樺」に初出。官能の匂い、陰惨の空気。虎彦はそうした劇作に特徴的に極めて優れたが、「タマルの死」はその出発点でもあった。大正二年(1913)には「世界的文人」たるべく渡欧、もっぱら西欧の文壇に盛名を得て多くの作品を遺して遂に帰国せず、スイス、モンターナ山上のサナトリウムで没した。

## タマルの死

### 人物

美はしき髪を持てるダビデの子アブサロム

智者アヒトベル

兄アムノンに辱められたるアブサロムの全き妹タマル

第一の僕

第二の僕

第三の僕

第四の僕

第五の僕

第六の僕

## 時代

旧約ダビデ王イエルサレム統治時代

## 場所

エフライムの辺なるバアルハゾル

## 第一段

アブサロムの邸なる屋上の露台、何等の器具をも備へずして徒(いたづ)らなる空台に只手欄(てすり)をめぐらす。(即ち舞台にては正面の奥をくぎれるのみ。)曇りたる空に「日の旅」ばかりを隔てたる山々の連(つらな)れるを見る。中央よりやゝ右手によりて、階下に通ぜる幅ひろき段階の口あり、登る者は見物に背(そびら)をなす。六人の僕(しもべ)等、手欄に居倚(みよ)り野外を眺めつゝ語る。

**第一の僕** 見ろ。あのエフライムの市(まち)の外(はづ)れから、蝗(いなご)の様に揃つた驟馬(らば)の一行(ひとならび)が、ほこりを蹴立てゝ飛んで来るぢやないか。

**第二の僕** うむ見えるわ。一人、二人、三人……七人の王子達(みこたち)だな。今日はわざと随従(とも)を連れずに来るといふ話ぢやつたで。

**第六の僕** ダビデ王の王子達(みこたち)にみ恵みあれ、アーメン。

**第四の僕** アーメン。

**第一の僕** 気を付けて見ろ。あの緑色の衣(きもの)で一番先の白い馬にのつてくるのがアムノン様だぞ。

**第五の僕** 何、一番先にのつてくるのがアムノンだといふのかい。あの旗の様にひらひらした衣(きもの)の上から己達(おれたち)の刀を突き刺してやるのだな。久し振りに腥(なまぐさ)い血を嗅ぐ時が来たと思ふと、今からもう身体の内がむづむづして来るわ。

**第六の僕** かりにも王様の王子(みこ)だ。あのお胸から血を流さうと言ふ奴は、まむしの縄で火の岩にくゝられて、鷲(こ)に眼でも啄(つい)ばまれるのをまつてゐるがいゝ。

**第五の僕** アムノンが王子(みこ)ならアブサロム様だつて王子(みこ)だ。主(あるじ)の王子(みこ)の命令(いひつけ)で不義者のくされた膿血(うみち)を流すのに、何だつて呪ひの舌など使ふのだ。自分の妹に思ひをよせて、紅葡萄酒

(つゆ)よりも清らかな処女(をとめ)の血を、恐ろしいたくらみで汚したほど例(ためし)のないいつはりが、神様のお怒りから逃れて居ると思ふのかい。

**第二の僕** ほんとに今でも忘れぬわ。タマル様があの自然(ひとりで)に香膏(にほひあぶら)でも滴る様なつやつやしい髪から顔へ、ばらばらと灰をかむつて、処女(をとめ)のふりそでもずたずたに引きさき乍(なが)ら、泣きよばつて来たいぢらしさは、嵐に破(やぶ)きさかれて泥にまみれた百合の花よりまだ哀れな様子だつた。イスラエルにあんな愚人を生かしておくのは、たとへ王子(みこ)でも王様でもエホバの宮を汚すといふものだ。

**第六の僕** 自分の妹に思ひをかけたのが、それほど恐ろしいことだつたら、お前達はもつと近いところを見るために、池へ行つて眼でも洗つてくるがい。

**第四の僕** 気をつけてものをいはぬかよ。王子様(みこさま)が登つてお出でだ。

アブサロム、アヒトベル段階より登り来る。

**アブサロム** (甚だ美しく長き黒髪を具へ、凡て風采の典雅なる貴公子。)もう皆(みんな)のかけてくるのが見えて来たか。

**第一の僕** あの羊の群(むれ)の居ります森のそばを今通つてお出でゞ御座います。馬の蹄(ひづめ)から立ちましたほこりが、草原にお這入(はひ)りになつたので立たなくなりました。

**アブサロム** (アヒトベルと共に手欄の方に進みよりつゝ。)うむ。一番先の白い馬にのつて緑色の衣(きもの)をきたのがアムノンだな。あの馬の蹄が大地を蹴るのにつれて、己(おれ)の胸にも湧き立つた血がたゞく様に迫つてくるわ。お前達はもういゝから下へ行つて、ふるまひの仕度(したく)を整へて来い。いざといふ時に折角はつた心の弦をゆるめずに、命令(いひつけ)るものが己だといふことを忘れまいぞ。

**第二の僕** 其のお心づかひは古びた落穂ほどお役に立たないもので御座います、もう私共の血管(ちくだ)といふ血管(ちくだ)は小蛇の様に躍り立つて参りましたし、私共の刀の刃は人の骨を突き砕いた位でこぼれは致しませぬ。

**第四の僕** ダビデ王の王子(みこ)にみ栄え永遠(とは)にあれ。(他の僕等も同音に。)アーメン。

僕(しもべ)等悉く去る。

## 第二段

**アブサロム** 段々近くやつてくるわ。アヒトベル今日こそお前のち糸をきいたことが、後悔の種になるやうなことはあるまいな。

**アヒトベル** (醜き禿頭白髭の矮人。拳措凡て卑し。)まだそんなことを仰せになつて、あなたのお舌では香(かぐ)はしいレモンのち糸と、くされた無花果(いちじく)のち糸とが、御弁別(おみわけ)ならぬと見えますの。

**アブサロム** さういふ訳ではないのだが、今日は朝起きてから己(おれ)の胸の中には、丁度井戸の土がくづれて水へ落ち込む様な、不祥な物騒ぎがしてならないのだ。

**アヒトベル** そんな物騒ぎをなさるといふ弱いお心が第一不祥で御座います。エホバの御心(おこゝろ)に逆らつたことをしやうとなさいますには、もつとかたくなな胸を持つてお出でにならねばなりません。鉄の葉のうるこをきれば、盗人の様に這ひ込んでくる神の光りに胸はたゞれてしまひます、私のち糸に従ふことをお疑ひ遊ばしますな。私の語る言葉は銀の彫刻(ほりもの)に金の林檎をはめた様な、機(おり)にかなつたもので御座います。

**アブサロム** では今夜こそ己の狂犬(やまいぬ)の様にあさましい煩惱が、金の果(み)を拾ふ時だといふのだな。

**アヒトベル** 実證サタンの名をかけてお誓ひ申します。もう御兄弟達の見えるのも程ないことで御座いませう。今の内にお二人きりでようお心を引いて御覧なさいませ。ともかく私がおよびして参りませう。

と段階を下らんとする時、あわたゞしげにタマルの登り来(きた)れるに遭ふ。タマルは黄色の衣(きもの)を纏ひ明(あきらか)に長き憂鬱の沁み渡れる蒼白き美貌也。

**アヒトベル** 丁度よい所で御座いました。では私は仕度を助けて参りますから。  
(とアブサロムと目にて語りつゝ下る。)

### 第三段

**タマル** お兄様、もうあの人達が近づいてくるといふのは真実(ほんとう)で御座いますの。アムノンの兄様が緑色の衣(きもの)をきて白い馬にのつてくるといふのは真実で御座いますの。(と言ひつゝ手欄の方に進みより。)あゝもうあんなところまで来ましたのね。

**アブサロム** いまにぢき蹄の音も聞えやう。タマル、今日こそお前のよろこびの日が来たのだ。二年といふ永い日の間なきはらした眼を奇麗に洗つて、もうはぢを雪(すゝ)がれるお前のからだに、晴れやかな碧い衣(きもの)でもきてく

るがいゝ。

**タマル** (絶えず野の方を凝視しつゝ。)お兄様何だか息が大変苦しくなつて参りましたわ。いろいろなものが奇妙な青い色に見えて、それに耳の中でなり出した不思議なもの音が、あの泣き蛇の声よりもつと気味が悪う御座いますの、中から蠍(さそり)といふ恐ろしい蟲でもかみつく様に、乱れた動悸が胸を啄(つゝ)いて、ほんとに変な心持になつて来ました。

**アブサロム** さういふものだ。怨みをよせた者の血を流すに迫つた時は、男でも不思議な胸騒ぎがするものだ。私の胸でさへ今とかげののどの様に激しい波が打つて来たわ。

**タマル** あの恐ろしい日からもう二年もたつて居るのだとは、どうしたつて思ふことが出来ませんわ。だけど今といふ今、血管(ちくだ)の中に吸ひこまれた針の様にからだ中を刺し廻つた耻(は)ぢと憎しみとが、はれやかにすゝがれる日が来ましたのね。ほんとに兄様、一時も早くあのアムノンが血につかつて苦しむところを見せて下さいまし。

**アブサロム** お前の願(ねがひ)はもうすぐ叶へてやるのだが、その代りには此の間からいふ様に私の願もきいてくれるのだらうな。

**タマル** ええ此の願さへ叶へて下さるならどんなことでも致しませう。裏の葡萄畑へおりて行つて、蛇のまきついた枝でもかまわずに、黒い真珠の様に甘く熟れた房々を、肩になふまでちぎつて来て、イエルサレムに行つても買へない様な、濃いお酒でも造つて上げませう。此頃の様子に夜毎夜毎眠りにくいと仰せる時には、幾晩でも幾晩でも、あのいつもの豎琴の絃をとりかへて、お父様のお造りになつた讃へ歌を、朝の星が日の光りに吸ひ込まれて、草に降つた露が輝いて見える時分まで、唱ひ明して上げませう。もつともつと、どんなにむづかしいおいひつけでも、アムノンの兄様さへ殺して見せて下さるなら、きつと私の手で仕遂げてさし上げませう。

**アブサロム** お前の可愛いゝ唇が、不思議な柔い貝殻の様にあいたりどぢたりする間から、其のつやゝかな声がひゞくのをきくだけで、私の心持は濃い酒を呑んだ様になつて行くのだ。どんないひつけにでも従ふといふことを、お前はまちがひなく誓つてくれるのだな。

**タマル** 一番畏ろしいエホバの御名を指して誓ひますわ。まだ熱い血の噴き出てくるアムノンのからだを私に下すつたら狂ひ猫の様に爪でかきむしつて、足の先まで髪の毛を一つ一つに引き抜いて、それからまたあの禿鷲のする様に、からだ中の繊維(すぢ)も残さないまでかみしだいてやりませう。

**アブサロム** (次第に我を忘れ行くが如く。)タマル。パテラビムの池の水より輝いたお前の眼を、私のこの胸の中に投げ込むでおくれ。赤く熟した柘榴(ざくろ)よりもまだ甘いその舌の味を、私の渴いた咽喉(のど)に記憶(おぼえ)さし

ておくれ。タマル！

今や全く其の心を失へるものゝ如く、進みよりてタマルの手を取らんとする時、第一の僕あわたゞしく登り来れるに、忽ち静なる我に返る。タマルまた兄が怪しき煩惱の焰を解せざるが如く、たゞ近く迫れる己(おの)が怨恨の恍惚に酔ひて空しく立つ。

**第一の僕** (未だ全く露台に登らず、肩のあたりをもて見物を背<そびら>にし、やゝ口ごもりつゝ)かう皆様がお出でゝ御座います。あの表の小門から砂道(すなみち)の方へお這入(はひ)りで御座いました。

此の時よりタマルは絶えず走(は)せ来る野の兄弟等を見下しつゝ、殆ど何人のものいふ声もきこえざるが如く、次第に我を失ひ行く。

**アブサロム** (かへりみて野を見下しつゝ。)もうそんなとこまでやつて来たのだな。仕度はすつかりとゝのえてあるのか。

**第一の僕** 凡て仰せの通りに致して御座います。

**アブサロム** 己(おれ)もいますぐに行くから、皆(みな)慄(ふる)へる心を静めて仕度をしてゐるがいゝ。

第一の僕退場。

**アブサロム** 己の心もせき立つて来た。まだ盃が一とまわりもせぬ内に合図の手をおろして、みんなの刀をぬかせねばならない。もう蹄(ひづめ)の音がきこえて来た。タマル先刻(さつき)の誓ひは忘れまいな。(退場。)

## 第四段

**タマル** (暫らく手欄にすがりてのぞき下し、やゝありてはじめて見物の方に向き直り、しかれども、己が心を自ら保ち得ざるうつけたる魂の如く。)神様、ほんとのことを仰つて下さいまし。あのレバノンの香柏(にほひかしは)の様な雄々しい姿をして、緑色の衣(きもの)をきた若人(わかうど)がほんとにアムノンの兄様なので御座いませうか。小さい時分見た大理石(まめいし)に刻むだ異教の偶像を、世にもこんな美しい顔があるのかと思つて、今だに忘れずに居ると少しもちがはないあの凜々しい姿が、ほんとにアムノンの兄様なので御座いませうか。あの兄様が此の年月、くされた油の様な耻ぢと憎しみとを注ぎかけて、もうこの

からだは日の明るみへも出られない様にした方なのかしら。あの恐ろしい日、いまわしいくらみごとで鮮かだつた処女の血を吸ひ取られてしまつた時には、たゞ夢中に眼が眩(くら)むで、窓の外にぎらぎらと日をてり返した橄欖の葉が、頭の中で渦まく様に覺えたばかりだつたのが、不意に耳元でかすれた様な声がして、「出て行けタマル、女の中で一番悪(にく)らしい女のタマル、さあ出て行け」といはれた時には、今から思へばとび立つ様にもして出てくる筈なのに、不思議と何ともいへない悲しい気がして、「兄様、そんなことを仰るのは、今なすつた恐ろしいことより尚恐ろしいことですから」と、詫びる様に云つただけれどきいては下さらず、しまいにはあらあらしくこの腕をつかんで戸の外へ突きやつておしまひになつた。あんなおそろしいことをした兄様がほんとに今あの綺麗な顔を輝かして緑色の衣(きもの)をきてゐた方なのかしら。

アブサロム 段階を走りて上り来る。

**アブサロム** (息を切らしつゝ。)タマル、早くおりて来い。盃が一とまわりみんなの席をまわる内と思つたのだが、もう己(おれ)の胸の中には火をつけた濃い酒でももえ立つ様に、のどから昇る熱い息で舌でも顎でもやきたゞれる様になつて来たわ。今こそ血を吐く犬の様な悲鳴が、豎琴の銀の絃(いと)より嬉しくきこえる時が来たのだ。さあ、早くおりて来ないか。

**タマル** 私はもう下へは参りません、おりて行くのはいやで御座います。

**アブサロム** いまあのアムノンのからだを、一とすぢ一とすぢに切りこまざく時が来たのぢやないか。お前の舌は何を言つて居るのだ。

**タマル** もうどうしてもおりて行くのはいやで御座います。私には其のはしごをおりて行く力がなくなりました。兄様、しばらく私を一人で置いて下さいまし。

**アブサロム** お前の舌は今までもえる火の言葉を吐いてゐたのに、もう臆病な小蛇の様にへらへらとよわいこゝろを吐くばかりになつたのかい。ともかく私のあとからついてくるがいに。

**タマル** どんなに仰つても、この足がもうからだを下まで運んではくれないのですから、私はおりては参りません。それよりも兄様どうぞ私の前から退(ど)いて居て下さいまし。私の眼に今映つてゐる幻を消さないで……。さういふ間にも何だか風に吹かれた霧の様に、段々うすく消えて行くのぢやありませんか。お願いですから兄様、そんなにいかめしく立ちはだからず、早く私の眼から見えなくなつて下さいまし。其のはしごをふみならしておりて行つて下さいまし。

**アブサロム** タマル、可愛相にお前は気が狂つたのだな、あんまり眼の前に輝

いた光りが迫つて来たので、心の瞳がうろたへたのだな。気をしづかにしてそこにゐるがいゝ。イエルサレムの精金よりも重い血の滴つた首を、あの一番大きな皿にのせて、お前の可愛いゝ足の下まで運んで来てやらうわ。其の時にはもう乱れた心を梭(おさ)にかけて、美しいタマルの衣(きもの)をきてくれる様に今から頼んでおくのだぞ。(退場。)

## 第五段

**タマル** (段階の方に走りよつて。)お兄様。下へ行つてはいけません。下へ行つてアムノンの兄様の血を流してはいけません。小指の先を針について、絹絲の様な血を流してもいけません。どうしてもアムノン様の血が入用(いりよう)なら、私のからだにも混つてゐるのを搾(しば)り取つて下さいまし。抜いた刀を、血ぬらずにさやへ納めることが出来ないなら、私の胸にさし通して下さいまし。こんなに熱くほてつた乳房が、つめたい刃をくわゑた時は、どんなにいゝ心持がするのでせう。

然れどもこの時凄まじき騒擾の声、物の撥くるが如く一時に起り、罵り怒る声々にまじりて、断末魔の悲鳴の如きものきこえ来る。タマルは愕然として躍り立ち、いふべからざる悲愁は、熱き泉の噴き出づるが如くに。

**タマル** (この独白の間絶えず喧擾の声きこゆ。)あ、あの声はどうとう兄様が……アムノン様、誰かゝ刀でさしに来ますの。神様、お助けなすつて下さいまし。あゝそのくるしさうな声は、いくつもの刀が突き通し刺し通しするので御座いませうね。兄様。なぜ私を突き刺して下さいませんでしたの。そんなに血といふものが欲しいのなら、この胸をたちわつて血ぶくろでも何でもゑぐり取つて行けばいゝのに。

## 第六段

アブサロムは新しき流血に半ば狂へるが如く、段階を走(は)せ上りしが其の美しき豊髪を見物より見らるゝあたりにて立ち止る。

**アブサロム** タマル、見ろ。血に濡れて重くなつたアムノンの首だ。お前もこ

の刀で突き刺して見るがいゝ。くされた犬の屍骸のやうにもう眼をあくことも出来ずに居るわ。

タマル (絶叫して。)呪はれていらつしやい、悪魔のアブサロム。贖罪の羊の血より尚(なほ)聖(きよ)らかな、アムノン様の血を流した手には、天から火の柱が落ちて来て、顔もからだも細い毛條(けすぢ)の様に、チリチリとやきちゞれてしまふのだ。

アブサロム タマル!

タマル いゝえ私は心などちつとも乱れては居ませんの、アムノン様、焰の舌をひらめかしてもつともつと燃える呪(のろひ)を吐きかけてやりませう。悪魔のアブサロム。其の長い髪の毛が小蛇の様に木の枝にからまつて、くびり死(しに)をする人の様な醜い亡びをする時が、もう近い日に迫つて来やうわ。悪魔のアブサロム……。

アブサロム憤怒(ふんぬ)してタマルの胸を刺し之を仆(たふ)す。未だ血の滴(したゝ)れる劔は赤き蛇のひらめくが如く、更に焰の如き呪ひを吐かんとしたる魂を破り畢る。

タマル アムノン様! ………

怪しき最後の叫びと共に辛うじて言ひ得たる時、再び劔は其の胸を刺して全く其の命殺す。アブサロムは無言にして台に昇り、手にひつさげたる血滴れるアムノンの首を未だ熱き屍骸の上に投げ出す。この時口々に罵りわめきつゝ、手といはず顔といはず血にまみれたる僕(しもべ)等、各赤き劔をひらめかしつゝ昇り来りしが、突如眼前に横(よこた)はれる異変に、唇は一切にしてとぢ、或者は死屍と死首とを視、或はその主を視、又或者は互に打ち見合ひつゝ、たゞ茫然として深き沈黙に陥る。いま劔等より滴り落つる血の点音をもきくを得べきに似たり。 幕。